

「膀胱腫瘍における臨床病理学的所見と MRI 画像所見との相関、及び画像所見を含めた臨床病理学的所見と予後との関連性についての検討」のお知らせとお願い

膀胱腫瘍では、通常術前検査として通常膀胱鏡検査(以下膀胱鏡)、尿細胞診を実施し、加えて腎盂・尿管癌といった上部尿路腫瘍や転移巣の有無を確認するため CT 検査と、腫瘍の壁深達度診断目的で MRI 検査(以下 MRI)を実施しますが、MRI は膀胱鏡ほど腫瘍の局在診断、特に小径腫瘍の検出には適していないと言われて来ました。ただ膀胱鏡は、軟性膀胱鏡を使用しても患者さんにある程度の不快感を強いる検査であり、より苦痛が少なく検出能に秀でた検査法が望まれるところです。加えて近年の MRI では 10 mm 未満の小径腫瘍を指摘され、それが最終診断に繋がることも度々あり、決してその局在診断能を含めた尿路上皮癌検出能は低くないことが推測されるようになって来ています。今回我々は、MRI 所見と、膀胱鏡所見や術中所見、病理組織学所見との一致性等について比較し、その有用性を検討することとしました。また、通常我々は日常診療において欧州泌尿器科学会(EAU)や National Comprehensive Cancer Network (NCCN)の膀胱癌診療ガイドラインを参考に診断から治療を進めていますが、患者さんの身体的・社会的要因により、実臨床にそぐわない治療方法を選択せざるを得ないことも度々見受けられます。そこで、MRI 等の画像所見とともに他の臨床病理データについても個々の患者につき調べたうえで、膀胱内再発や膀胱外再発を予測するリスク因子の検出と、リスクの層別化を実施することとしました。リスク因子を有していない症例と、複数のリスクを有する症例では再発までの期間に有意差が認められる可能性があります。リスクのない症例において、術直後の膀胱内注入療法や外来での維持膀胱内注入療法を減量出来るかも知れないという想定のもとに、統計解析を実施したいと思います。

今回我々は 2010 年 1 月から 2014 年 7 月までに防衛医科大学校病院泌尿器科において経尿道的手術が行われた 350 例を対象とし、MRI 画像所見を含めた臨床病理学的データと、再発や転移、予後との関連性につき検討します。具体的には膀胱内あるいは膀胱外再発までの期間に影響を及ぼす因子の統計学的有意差を検討します。これを独立因子と呼びますが、これら独立因子を複数有することによる再発の危険性、再発予防策についても検討します。

本研究は、今後患者さんから新たに検体を採取したり投薬をしたりすることはなく、これまでの外来及び入院治療での既存資料のみを用いる後ろ向き研究です。患者さんの臨床病理データは ID 等個人情報とは無関係な番号付与による匿名化された状態で管理され、通常の診療内容と同様にプライバシーが保護されます。また 2010 年 1 月から 2014 年 7 月までに防衛医科大学校病院泌尿器科で膀胱腫瘍に対し経尿道的手術が行われた方で、御自身の治療経過等のデータを研究に使わないで欲しい、という御希望があれば下記連絡先まで御連絡頂けますようお願い致します。

なお、研究への使用の拒否の意思を表明されても、防衛医科大学校病院泌尿器科における診療には全く何の影響もなく、いかなる意味においても不利益を被ることはありません。

連絡先:防衛医科大学校病院泌尿器科

黒田 健司

Tel: 04-2995-1211(内線 2392)